# はじめに ～図書館大型コレクションと思想史研究

## Avant-Propos
## Foreword

2022 年 12 月 3 日、ミニ・シンポジウム「国内所蔵の西洋古典籍をいかに活かすか―早稲田大学図書館所蔵コルヴェア文庫所収の貴重書を中心に―」がオンライン形式で開催された（主催：「啓蒙の言説圏と浮動する知の境界：貴重書・手稿・デジタル資料を総合した 18 世紀研究」（科研費基盤研究 B）研究グループ、共催：一橋大学社会科学古典資料センター、後援：日本 18 世紀学会、協力：早稲田大学図書館）。本報告書は、その記録である。

私が研究代表者を務める上記科研費基盤 B の研究グループでは、図書館が所蔵する西洋古典籍を思想史研究の現場にどのように活かすかという問題意識に基づいて、研究を積み重ねてきた。その一環として、コロナ禍初年度の 2020 年度を除き、年に一度のペースでシンポジウムを開催した。「書物の記述・世界の記述――書誌が描く 18 世紀啓蒙の世界」（2019 年 12 月 20 日、一橋大学佐野書院）、「西洋古典籍を巡る書誌と資料研究法の現在―『水田文庫貴重書目録補遺；水田珠枝文庫貴重書所収』を中心に」（2022 年 1 月 22 日、オンライン）と来て、これが三回目である。私たちの研究グループは、三つの国内大学図書館での調査に力点を置いた。すなわち、一橋大学社会科学古典資料センター、名古屋大学附属図書館、早稲田大学図書館である。三度のシンポジウムはそれぞれの図書館の蔵書と関連づけて企画したものであり、これで一巡したことになる。

本報告書には、第三回シンポジウムの三つの研究発表をもとにした論文および討論の模様が収録されている。それぞれの概略を以下に示しておこう。

福島知己論文「文庫とその周辺――Corvaia, Bernstein, Gerits」は、コルヴェア文庫の来歴から説き起こす。反王権の自由主義運動に身を投じたコルヴェア男爵は、自ら社会改革を構想するかたわら、書物の収集にも励んだ。19 世紀の初期社会主義思想に力点を置くコルヴェア文庫を、福島論文は「書物でたどる近代フランス経済・社会思想史」と特徴づけている。男爵没後も文献収集は続けられ、文庫は現在の状態になった。そこには遺族の他、ゲーリッツやベルンシュタインといった古書籍商の関与も見られる。そして、コルヴェア文庫が早稲田大学図書館に納入されるに当たって力を尽くしたのも、ゲーリッツとベルンシュタインである。大型コレクションの成立には、西洋古典籍を取り巻くネットワークの存在が大きいのである。福島論文の成果は以上にとどまらない。コルヴェア文庫において特権的な地位を占めるフーリエ主義の文献に着目し、図書館資料のコレクションという形態から出発した思想史研究の実例にもなっている。

雪嶋宏一論文「コルヴェア文庫の 1649 年―コルヴェアによるマザリナード文書の収集―」は、1649 年に出版された文献に注目した論考である。コルヴェア文庫は約一万点の文献から

構成されるが、出版年代に注目すると三つの山が認められる。その最初の山が 1649 年で、これはフロンドの乱の時期に相当する。フランスでルイ 14 世が即位して間もない頃、実権を握ったマザラン枢機卿の支持派と反対派が膨大な文書で応酬を繰り広げたが、それらを総称してマザリナード文書と呼ぶ。雪嶋論文の成果は、コルヴェア文庫には 262 点に及ぶマザリナード文書が含まれていることを明らかにした点にある。それは文献を一点ずつ調査してようやく得られた成果であり、目録にはまだ反映されていない。ある文献の目録を作成する際、それがマザリナード文書であるという印をつけておけば、一括して抽出することも可能である。そうした作業は新たな研究に道を開くであろう。こうして、図書館資料の目録をいかに整備するかという問題が浮き彫りになる。

坂倉裕治論文「旧体制下フランスにおける非正規本―リヨンで印刷されたエルヴェシウスの作品の場合―」は、ある書物がいつ、どこで、誰によって印刷されたかに着目することが思想史研究として成立することの格好の事例となっている。1758 年、エルヴェシウスの『精神論』は出版禁止処分を受ける。しかし、こうした措置は当該作品を抹殺するどころか、危険で魅力的な書物として宣伝する効果をもたらす。その結果、海賊版が制作されることになる。リヨンに拠点を置く印刷業者ブリュイゼは、その手の海賊版を数多く手掛けた。同じタイトルを掲げる作品であっても、正規本と非正規本では内容に異同がある。そのような細部を比較検討することで、書かれたことの読解を超えたレベルで、思想の流通経路などが浮き彫りになる。坂倉論文では、コルヴェア文庫所蔵本と他大学図書館所蔵本、さらに著者所蔵本をもとにして、緻密な検討が重ねられる。モノとしての特性（たとえば紙の透かし）も重要である。ある文献を一点所蔵していれば二点目を購入するに及ばないということにはならないし（それは貴重な非正規本かもしれない）、インターネット上で読めるから実物は要らないということにもならない（画像では紙質を確かめられない）。

以上三つの論文に加えて、シンポジウムにおける討論も文字に起こして収録した。登壇者三名が自身の発表の枠では話せなかったこと、他の発表を聴いて考えたことなどを、かなり踏み込んで展開している。また、研究グループのメンバーである長尾伸一、松波京子両氏から、イギリスの事例についての説明が加えられた。フロアからも図書館職員の方から目録の作成と公開をめぐる問題が指摘された。こうした現場の声が書き留められることには、大きな意味があると思う。

図書館職員の方々が大勢このシンポジウムに参加してくださったことは、私たちの研究グループにとって力強い支えとなった。2019 年度から始まったこの共同研究において、図書館職員と思想史研究者との協力関係をどのようにして構築するかは、常に重要な課題として認識されていた。一朝一夕に可能になるわけではないが、また、予算の裏づけという現実問題が立ちはだかってはいるが、図書館での目録作成と思想史の研究が連携することの意義を認識することが、第一歩になることは間違いない。

過去二回のシンポジウムと同じく、このたびのシンポジウムも一橋大学社会科学古典資料センターの献身的な尽力によって開催することができた。そして、これまた過去二回と同じく、Study Series の一冊として報告書をまとめることができた。発表の場を提供していただいた一橋大学社会科学古典資料センターには、この場を借りて厚く御礼申し上げる次第である。

**研究グループを代表して**

**小関　武史**

Takeshi KOSEKI

本研究は JSPS 科研費 JP19H01200 の助成を受けたものです。